

## 長崎県感染症発生動向調査速報

平成25年第15週 平成25年4月8日（月）～平成25年4月14日（日）

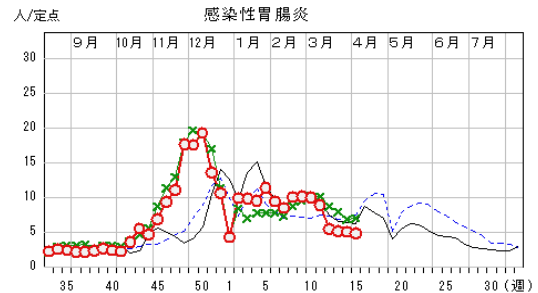
## ☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

## (1) 感染性胃腸炎

第15週の報告数は212人で、前週より11人少なく、定点当たりの報告数は4.82であった。

年齢別では、2歳（36人）、1歳（28人）、3歳（20人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県北保健所（10.33）、佐世保市保健所（7.50）、上五島保健所（6.00）が多かった。

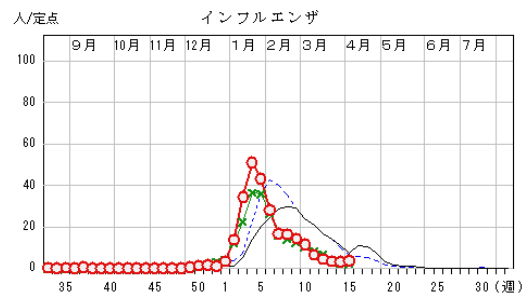


## (2) インフルエンザ

第15週の報告数は258人で、前週より48人多く、定点当たりの報告数は3.69であった。

年齢別では、10～14歳（34人）、9歳（22人）、1歳（21人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、上五島保健所（9.33）、長崎市保健所（8.18）、県央保健所（3.30）が多かった。

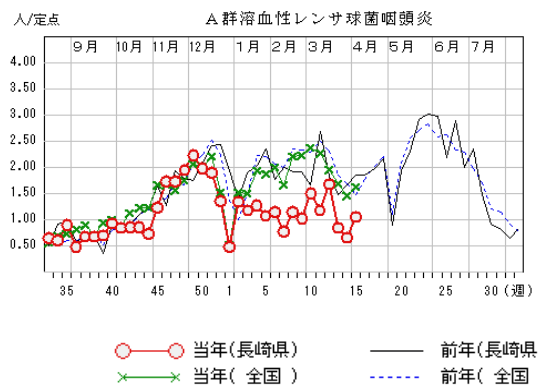


## (3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第15週の報告数は46人で、前週より17人多く、定点当たりの報告数は1.05であった。

年齢別では、4歳（8人）、7歳（7人）、2歳（5人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県南保健所（2.80）、西彼保健所（2.75）、長崎市保健所（1.40）が多かった。



○ 当年(長崎県)      ー 前年(長崎県)  
× 当年(全国)      - - 前年(全国)

## ☆トピックス・季節情報

## 【感染性胃腸炎】

第15週の感染性胃腸炎の報告数は212人で、前週より11人減少し、定点当たりの人数（4.82）も全国定点当たりの人数（7.01）以下でした。県下全域から報告があり、県北地区（10.33）では他の地域に比べ患者報告数が多いようですが、全体的には流行のピークは過ぎ、終息に向かう状況で推移しています。

例年10月から11月にかけて流行の立ち上がりが見られ、12月中旬頃がピークとなる傾向にあることから、国は昨年11月13日に、厚生労働省より「感染性胃腸炎の流行に伴うノロウイルスの予防啓発について」の通知を出しました。さらに、本疾患による患者数の全国的な増加が、同時期では過去10年で平成18年に次ぐ高い水準であることから、11月27日に同省から「感染性胃腸炎の流行状況を踏まえたノロウイルスの一層の予防啓発について」の通知が出されています。現在、全国的にも減少傾向にあるようですが、まだまだ十分な注意が必要です。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くは1～2歳の乳幼児が占めています。原因はロタウイルス、ノロウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。

原因微生物のうち、ロタウイルスについては2011年7月にワクチンが製造承認され、2012年7月には国内2製品目が発売されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に、小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるよう心がけましょう。

【インフルエンザ】

長崎県における第15週の報告数は258人で、前週より48人増加し、定点当たりの人数(3.69)も全国定点当たりの人数(2.00)を上回りました。県下全域で終息基準値「10」以下となり終息に向かっていますが、上五島地区や長崎市のように報告数が再び増加している地域もありますので、油断は禁物です。

暖かい日が続き、すっかり春めいてまいりましたが、花冷えのする日もあるようですので、体調管理に十分気をつけましょう。新学期を迎え、子どもさんたちは接触の機会が再び増加しています。外出からの帰宅時にはうがい、手洗いの励行、マスクなどによる「咳エチケット」で積極的な感染防止に努めましょう。罹患した際には有効な抗インフルエンザ薬がありますので、体調に異変を感じたら早めに受診しましょう。

【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎】

長崎県における第15週の報告数は46人で、前週より17人増加しましたが、定点当たりの人数(1.05)は、全国定点当たりの人数(1.62)を下回っています。壱岐地区や五島地区、上五島地区を除く地域から報告があり、県南地区(2.80)と西彼地区(2.75)が他の地域に比べ患者報告数が多いようです。

本感染症の好発年齢は5～15歳で、鼻汁・唾液中のA群溶血性レンサ球菌の飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1～4日で、突然の発熱(高熱)、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により多くは1～2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早期に医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。

**☆トピックス：長崎県内で2例目の重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の発生が新たに確認されました。**

◎今年、1月30日に、国内発生例としては初めてダニ媒介性のウイルス感染症「重症熱性血小板減少症候群(Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome : SFTS)」の山口県における患者発生および死亡例が報告されました。その後、愛媛県、宮崎県からも相次いでSFTSウイルスが検出された症例報告があったところです。今回、平成25年2月26日に国内5例目の症例として長崎県における症例(2005年)が発表され、3月12日に新たに確認された3症例(いずれも回復)の中に本県では2例目となる症例も含まれていました。

<感染予防について>

◎感染源とされているマダニは全国に分布しており、主に森林や草地のほか市街地周辺でも見られ、春から秋にかけて接触する機会が増えることから、感染予防が最も大切です。今のところ、有効な抗ウイルス剤やワクチンはありません。

◎行楽やハイキング、農作業など、ダニとの接触が多くなる季節となりますので、野外で活動する際は、長袖、長ズボン、長靴を着用するなどして肌の露出を極力避けて感染防止に心がけましょう。

もし、ダニに咬まれていたことに気づいた場合は、自分で無理にとろうとせず、医療機関で取り除いてもらいましょう。

◎マダニに咬まれた後に発熱等の症状があった場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。受診した医療機関では、咬まれた状況などをできるだけ詳細に説明しましょう。

◎多くの場合、SFTSウイルスを保有しているマダニに咬まれることにより感染するといわれていますので、インフルエンザのように人から人へ感染して広がるものでないとされています。

<今までの国内症例について>

報告月日	県名	患者情報	渡航歴等
1月30日	山口県	成人女性1名(2012年秋に死亡)	最近の海外渡航歴なし
2月13日	愛媛県	成人男性1名(2012年秋に死亡)	最近の海外渡航歴なし
	宮崎県	成人男性1名(2012年秋に死亡)	最近の海外渡航歴なし
2月19日	広島県	成人男性1名(2012年夏に死亡)	国内感染疑い
2月26日	長崎県	成人男性1名(2005年秋に死亡)	国内感染疑い
3月12日	高知県	80代の女性1名、平成24年4月発症	国内感染疑い
	佐賀県	80代の男性1名、平成22年8月発症	国内感染疑い
	長崎県	50代の男性1名、平成17年11月発症	国内感染疑い

<重症熱性血小板減少症候群(SFTS)について>

(参考)厚生労働省ホームページ(重症熱性血小板減少症候群について)

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou19/sfts.html>

**☆トピックス：昨年に引き続き風しんが増加しています。**

昨年から風しんの患者数が他府県で増加しており、長崎県にお住まいの方々にも再三注意喚起してまいりました。

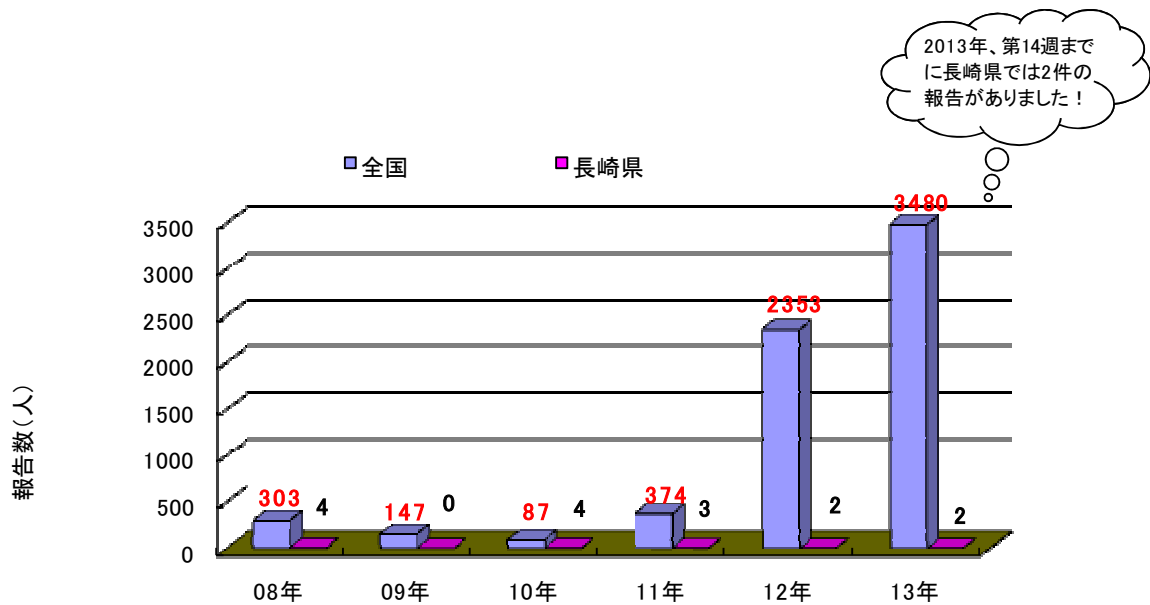
厚生労働省は、今年に入ってから風しんの患者数が増加し、「先天性風しん症候群」も5例（暫定値）報告されたことから、昨年5月、7月に続き、25年1月にも3度目の注意喚起がおこなわれています。

昨年の第14週の風しんの全国の累積数に比べ、今期の同時期では既に3,480と患者が急増していますので注意が必要です。

風しんはせきやくしゃみなどから感染し、通常は発疹や発熱が起こりますが軽微な症状で経過し、重篤化することはほとんどありません。しかしながら妊娠初期に感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など（先天性風しん症候群：CRS）を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風しんやCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦や妊娠希望者または妊娠する可能性の高い方にうつすことのないよう、パートナーや周囲の人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチンの接種を実施することが重要です。

**本県では第15週に1件の報告がありました。今後の風しんの動向に注視して十分に注意しましょう。**



報告年(2008~2013年第14週まで)

全国と長崎県の風疹の報告数の推移

